第二十五番　総本山知恩院の御詠歌（本願調）

（弥陀本願の御詠歌）

（歌詞は６３ページ）

ポイント注意

- 「くさもき」などの各音の立ち上がりは洋楽の装飾音風でなく、しっかりと力を込めて。
- また、「かれたる」の「か」、「ただひとり」の「た」の音程に注意。

第二十五番　山城の国　総本山知恩院

草も木も　枯れたる野辺に　ただひとり　松のみ残る　弥陀の本願
（観智国師御作）

浄土宗開創の念仏の根本道場であり、法然上人の御真骨を安置した御廟所（ごびょうしょ）のある浄土宗七千余ヵ寺の総本山であります。華頂山知恩教院大谷寺（かちょうざんちおんきょういんおおたにじ）と言うのが正しい名称であります。法然上人は43歳の御時、承安５年（1175）３月14日、南無阿弥陀仏と唱えるお念仏の声により、弥陀の本願に乗じて必ず浄土に往生することを得る、という浄土の法門を開かれました。末法万年の後すべての経文は滅んでも、お念仏の教えだけは後々までも生き続け、ひたすら衆生を救う力を増すと教えられています。観智国師（1544～1620）は、増上寺の第12世で源誉存応慈昌上人といい、徳川家康公の帰依を受け、法然上人の徳を慕い、総本山知恩院の興隆と近世浄土宗発展の基礎を築かれた高僧です。

大意　冬の木枯らしの吹きすさぶなか、すべての草木が枯れてしまった野辺に、松だけが常磐（ときわ）の緑をきわだたせているように、すべての教えがすたれてしまっても、弥陀の本願の御教えだけは何時いつまでも、私たちを護り導かれるのであります。

（楽譜は６４ページ）